

涼しくても 暖かい「化粧」

ビルマ女性の必需品

ビルマ(ミャンマー)を訪ねる人が、まさかき連れて行かれるのはバゴダ(仏塔)だろう。門前市では、樹皮がついたままの、直径五センチ、長さ二〇センチ程度の木切れが、数珠などに混じって売られている。いったい何に使われるのか不思議に思うにちがいない。

私は、ミャンマーの第二の都市マンダレーから六〇キロほど離れた農村に滞在していたが、タナッカーと呼ばれるこの木切れを見ない日はなかった。早朝、女性たちは井戸端で顔を洗うと、すぐに部屋へ入る。タナッカーの液を塗るためだ。チヤウピンと呼ばれるすり石に少量の水をかけ、ぎざぎざした表面に樹皮の部分が接するように置く。そして両手で木の両端をもち、腰を入れて円を描くように擦る。三分もすると、乳白色の液とともに、さわやかな柑橘系のなかにも少し甘さのある独特の芳香が漂いはじめる。十分分量の液が取れると、まずは顔につけ、続いて

首から胸元にかけて塗りこむ。そして液が乾かないうちに専用の刷毛でなで、塗りむらななくす。

実際に肌に塗ってみると、最初メンソールのようなスリットした清涼感が得られ、乾くとバツクしたときのようなじととした張りが出てくる。愛用するうちに、タナッカーが汗や皮脂を吸い取り、長時間肌をさらっとした状態に保つてくれることもわかってきた。タナッカーは、四〇度を超える暑さが続く乾期には、肌を「涼しく」し日焼けを防いでくれるが、寒い時期にも効力を発揮する。冬には、肌を乾燥と寒さから守ってくれるため、タナッカーを塗った肌はほかほかと暖かく感じられるのだ。ビルマの厳しい自然



写真提供:渡辺道二・秋濱友也

タナッカー

(学名: *Limonia acidissima*)

柑橘系の樹木。根は薬としても用いられ、樹皮を擦った液は日焼けを防ぐといわれる。タナッカーは高温多雨の気候を好み、適所で生育したもの程、擦ったときの香りが良いという。幹の太さにもよるが、商品用のタナッカーは、3mほどに育つと根本から切り倒される。下から1/3程度の幹の部分が商品となり、根に近いものは高く取り引きされる。

環境を過ごすには、なくてはならないものといえるだろう。

大切なおしゃれの手段

タナッカーは、農村の女性たちにとって肌を守るためだけでなく、美しく粧うための「化粧」でもある。たとえば、生後七日目ごろにおこなわれるゆりかごにのせる儀礼、パケットンでは、生まれた子が女の子の場合、美しく育つようにとの願いを込めて、ゆりかごのなかに擦り石やタナッカーを入れる。また、出産が無事にすんだことを感謝するための儀礼でも、出産を司る女の精霊、アウツメードーが美しく粧えるようにと、鏡とすり石とタナッカーが供えられる。お

飯國有佳子

(いくにゆき)

総合研究大学院大学文化科学研究科

しやれに気をうつかう妙齢の女性たちの間では、タナッカーの塗り方ひとつをとってもこだわりがあり、写真を撮るといふと必ずタナッカーの塗りなおしのための時間をとられる。結婚式など限られた機会にしかファンデーションや口紅を使用しない彼女たちにとって、タナッカーは大切な

日常のおしゃれの手段なのである。

近年、首都ヤンゴンの若い女性の間では、ファンデーションが日常的に使われるようになってきた。しかしタナッカーの「涼しさ」に対し、ファンデーションは「熱く」感じられることから、ファンデーションの下地としてタナッカーを薄く塗

る女性も多い。都市では、タナッカーの液を半生状に固め、高級感のある容器に入れた新商品が多数出回るようになり、先進国もその効果に目をつけ、日本の某有名化粧品メーカーが調査に来たという噂も聞かれる。タナッカー人気は、まだまだ衰えそうにない。



パケットンの儀礼。枕元に置かれているのは、チャウピン、本、コンバウト



ほおに白くタナッカーを塗って、仏教経典を読む儀礼に参加する中学生



シュエボー近郊のタナッカー園。女性2人が担いでいるのが原木



バゴダの門前市。手前の左右に置かれているのが、タナッカーの原木。中央は樹液を固めた乾燥タナッカー